

地域活性化のための雪活用のすすめ —福井における地域生活と雪との関わり—

和 泉 薫*¹

Utilization of snow for regional revitalization —Relation between local life and snow in Fukui prefecture—

by
Kaoru IZUMI*¹

1. はじめに

現在, 全国各地において地域活性化にむけた取り組みが行われている。積雪地域には, 雪資源とこれまで培われてきた豊富な雪文化が存在するが, 地域活性化のために雪を積極的に利用している例はそれほど多くない。記録に残る最近の豪雪である61豪雪(昭和61年)からもはや17年も経過していることや, 地球温暖化の進行で雪が少なくなる傾向にあるため, 人々の意識の中に占める雪の割合が減少してきていると考えられる。そのため, 長い間培われてきた地域生活と雪との関わりの歴史や雪文化が, 忘れ去られる傾向にある。

しかし, たとえ地球温暖化によって雪が少なくなっても, 積雪地域の活性化のために雪を利用することは欠かせない。むしろ少ない雪を有効活用する方が希少価値を生むであろう。そこで, 地域活性化に活用するためには, まず, どのような地域生活と雪との関わりの歴史や雪文化が存在するのかを再認識しなければならぬ。ここでは, 福井県を対象として雪の歴史や雪文化について調査した結果を報告する。

2. 福井県の降積雪

北陸地方の中で最も西・南に位置しているためか, 福井県の雪についてはあまり知られていない。しかし山地が多く海岸平野部が少ないという地形条件もあって, 特に木ノ芽峠から北の嶺北地域では, 他の北陸地方と同様に冬期の積雪量が多い。例えば福井市の最大積雪深は, 昭和38(1963)年に213cmを記録し, 過去100年間には3回も約2mに達している(図-1)。県庁所在地でこれほど雪が積もるところは日本全国他にはない。しかし, 少ないときには, わずか14cmしか積もらなかったことも2回ある。過去30年間の最大積雪深の平均も63cm程度である。すなわち, 積雪量の年々の変動が非常に大きいと言える。普段は大したことのない雪も, 時たま訪れる豪雪時には堪えられないほどの量になる。38豪雪(1963), 56豪雪(1981)時の福井市における市民生活の混乱ぶりは, 『豪雪を記録する』(福井新聞社, 1981)などを見ればよくわかるであろう。

こうした変動の大きい雪に対処するのは容易なことではないが, 福井の人々は, はるか昔から雪とうまくつきあってきた。最近出版された『雪とつきあう福井の歴史』(本多ほか, 2003)などを見てもわかるように, 福井における地域生活と雪との関わりの歴史や, そこから生まれてきた雪文化にはたいへん興味深いものがある。

*¹ 新潟大学積雪地域災害研究センター

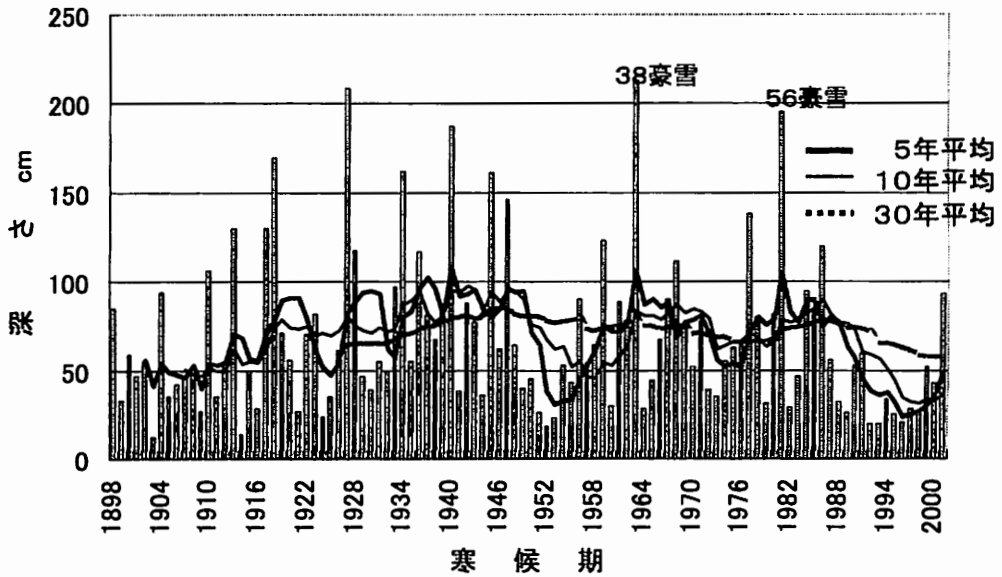


図-1 福井市での年最大積雪深の推移 (本多ほか, 2003)

3. 雪崩の災害文化

平地の福井市などでは積雪の年々変動が大きいことを上で述べたが、山間地ではどうであろうか。奥越の大野郡和泉村では、最大積雪深の過去最高値は385cmで、平均値も170cmとかなり多く、年々の変動幅も福井市より小さい。したがって山地に近づけば、毎冬のようにかなりの積雪があり雪崩の危険性もでてくる。

福井県内で1900-1999年までの100年間に発生した雪崩災害を調べてみると、発生件数は300件、死者は225人もあったことがわかっている(和泉ほか, 2000)。昭和15(1940)年1月28日には、大野郡上庄村(現大野市)木ノ本の志目木鉾山を大アワ(乾雪表雪雪崩)が襲い、社宅など6棟を倒壊して、従業員34人を生き埋めにした。埋没者34人のうち30人が死亡し、これが過去100年間に福井県で最も多くの死者を出した雪崩災害となっている。

こうした雪崩災害の記録は、これまでの調べで日本では江戸時代の初め頃までたどれることがわかっている。江戸に幕府が開かれ幕藩体制の確立に伴って、各藩は築城や城下町整備を進め諸産業を振興した。そのため、森林が伐採されたり冬でも峠道の往来が行われるようになり、人々が雪崩に遭遇することが多くなった。

敦賀郡地方でも、街道で雪なだれが起こり旅人が難儀したため、敦賀郡代官は貞享元(1684)年、正田八ヶ村山内、刀根杉箸村山内など計6ヶ所に禁伐の立林(雪崩防止林)を設置した(敦賀市史編さん委員会編, 1979)。これら6ヶ所は、福井-滋賀県境付近で、敦賀から琵琶湖北岸にぬける街道沿いにあった。この立林は、記録上日本で最初に公に制定された雪崩防止林である。これは、津軽藩が元禄2(1689)年に、赤石組之内鴨村後山を雪なで止めの留山(雪崩防止林)に制定したのより5年も前のことである。福井における雪崩対策は、江戸時代全国に先駆けて行われたのである。

これは、裏を返せば福井-滋賀県境付近の街道沿線で雪崩による被害が頻発していたことにほかならない。寛永5(1624)年1月(旧暦)には、滋賀県余呉町中河内で江戸城の田安門石垣普請の援助にむかう福井藩士、役夫らが雪崩に遭遇し死者が出た。『国事叢記』では、「…雪顔ニ打込、八百余人死、…」と死者が800人も出たように書かれていて、これをもって日本で最多の死者を出した雪崩災害とする雪崩研究者もいる。しかし、この『国事叢記』は個人の編さん物であって、福井藩の正史『家譜』には、翌年の寛永6年1月(旧暦)に「江戸城田安門普請人足の内九人、途中近江国中河内で雪顔に会圧死。」としか書かれていない。実際、現地を調査してみると確かに中河内内内は雪崩の危険はあるところ

だが、800人も多人数が雪崩に埋没死するような地形は見あたらない。おそらく寛永5年か6年の1月に、中河内で福井藩派遣の役夫らが雪崩に遭ったことは事実だろうが、死者はそれほど多人数ではなかったと思われる。いずれにしろ、このような雪崩の惨害が起こっていたため、この付近では全国に先駆けて雪崩防止林が設置されたと考えられる。

この後も江戸時代、福井県内では大雪時に集落が襲われるなどの雪崩災害が発生してきた。その中で雪崩によって村全体が大きな被害を受けた例が、文化5（1808）年11月12日（旧暦）、大野郡下山村岡畑（当時郡上藩領、現和泉村）での雪崩災害である。この日の夕刻、アワ（表雪雪崩）によって15軒の民家が押しつぶされ男女58名と馬5頭が圧死した。被害を免れた村民は急遽避難したが、翌13日には残りの11軒も雪崩で全半壊し、村がほとんど壊滅するような惨事となった。この後岡畑の人々は、毎年11月11日を命日前日の精進日とし、道場集ってアワ惨事を供養することを昭和60年代頃まで続けてきた。供養が社交と懇親という深い雪の中での楽しみでもあったからかもしれないが、約180年もの長い間、特定の惨事の供養が連綿と続けられたということは驚異的である。これは雪崩の災害文化の最たるものと言えよう（和泉、1999）。

雪崩惨事の供養という災害文化は、継続的に行われることで雪崩という自然の脅威に対する意識が繰り返し高められるため、雪崩の危険からの回避につながる。上の岡畑の例ほど長期間ではなくとも、福井県には現在でも毎年欠かさず雪崩災害の慰霊祭を行っているところがある。それは、38豪雪時の昭和38（1963）年1月26日に、集団下校中の芦見小学校の教頭先生と児童8人が籠谷-大谷間で表層雪崩に遭い生き埋めとなって、先生と児童3人が亡くなるという災害のあった足羽郡美山町芦見地区である。翌年現場には慰霊碑が建立され、毎年命日には地区の子供会が慰霊祭を行って、雪崩災害防止に勤めている。2000年1月には当時の教員を招いて事故や救助の様子を聞く学習会も開催した。

こうした惨事の供養や慰霊という形での雪崩の災害文化が、しっかりと地域生活に根付いているのは福井県に特有のことと思われる。福井は浄土真宗王国のためその影響もあると考えられるが、福井県では災害においても地域社会と雪とが密接に関わっていることがわかる。

4. 山の残雪模様—雪形

春、雪解けが進んで積雪が山岳にしか存在しなくなる頃、山の斜面には残雪の白い部分と、雪が消えて山の地肌が露出した黒い部分が作り出す、様々な大きさの白黒模様が現れてくる。このような斑模様を日本人は古くから「代掻き馬」「種まき爺さん」「山の字」「万能鋏」など動物、人、文字、道具などの形に見立て、農作業の適期を知る農事暦や豊凶占いに使ってきた。これらは一般に「雪形」（ゆきがた）と呼ばれている。

雪形を日本全国にわたって調べた田淵行男（1980）によれば、北は北海道から南は愛媛県までの1道16県に311の雪形が分布している。ところがその中に福井県は入っていない。雪で覆われる山岳もあり農業も盛んな福井県に、伝承されてきた雪形がないというのは不思議であった。

そこで、地元の方に尋ねたり文献を探索したところ、福井県にも立派な雪形があることがわかった。勝山市北部に聳える越前甲山（1,319m）南西面の残雪が、向かって右に羽ばたく姿のツルの雪形になる（図-2）。しかもそれは、江戸中期に勝山の代表的な風景を詠んだ『勝山八景』の一つ「鶴峯の残雪」に該当する。江戸期には越前甲山を鶴が嶽と呼んでいたので、少なくとも江戸時代から毎春人々はその鶴の雪形を愛で、山の名前に



図-2 越前甲山の鶴の形の雪形（川原、1997）

もした。ただ、鶴の優美な姿として見えるのが麓の一部に限られることや、農事暦としては使われなかったため、次第に忘れられていったものと考えられる。

この他、深田久弥著『日本百名山』の荒島岳(1524m)の項には、荒島岳の正面の谷にY字型に残る雪を「鹿の角」と言って九頭竜川の漁師は鮎を採り始める目安にしたという地元の人の話が紹介されている。このような単純な雪の形の見立ては、きちんとした伝承が残っていないだけで、福井県でもかつてはごく普通に自然暦として使われてきたと考えられる。実際、以前勝山北部中学校に勤めていた川原茂氏は、勝山市北部地域の雪形調査を行って、越前甲山や大日山に「谷間の雪が、あし毛の馬になったら田植えができる」といった、農事暦として使われていた雪形の事例をたくさん見出ししている(川原, 1997)。今立郡池田町でも「部子山の雪がウシの背中ほどになれば田植えしてもよい」という言い伝えが残っている(福井県, 1984)。福井県にも、伝承されてきた雪形はたくさんあったことがわかってきた。

このような雪形の出現する時期や形の変化を支配するのが、冬の間の積雪量と春になってからの雪解けの速さである。このため雪形の出現時期や形態変化はその年の冬と春の気象が積算された総合的な結果と見なすことができる。そのことによって雪形は農事暦として意味を持ち、生活と密着した存在だったと言える。現在その実用性が廃れたとは言え、雪形には手軽に親しめる自然観察の素材としての意味がある。「鶴峯の残雪」のように伝承のある雪形を再発見したり、まったく新しい雪形を見つけたりして自然の作り出す妙味や科学を楽しむことも、地域を再認識しそれによって地域を活性化する手だてになると考えられる。

5. 銘柄に雪の字が入るお酒—雪酒

積雪地域は、雪が冬の大気を清浄にし、雪解けの清らかな水が豊富で、その水によって美味しい米が生産されるため、それらによって造られる日本酒はたいへん旨いと言われている。雪がこのすばらしい日本酒を造っていると言うこともできる。積雪地域では、銘柄に雪(ゆき)の字が入っている日本酒をよく見かける。ここではこのような雪の名前が付いたお酒を雪酒(ゆきざけ)と呼ぶことにする。

これまで調べた範囲で、雪酒は日本全国で400銘柄以上あることがわかっている。新潟県では1県でなんと100銘柄以上の雪酒を出している。新潟県に次いで雪酒を多く出しているのが山形県で、次が北海道である。この順序は、過去に発生してきた雪崩災害件数を都道府県別に並べた順序と同じになっている(和泉ほか, 2000)。これは長年、雪崩などの雪害に苦しめられてきた積雪地域が、社会基盤の整備などによって、雪を克服する克雪社会から雪と親しむ親雪社会へと移り変わりつつあることの反映であろう。これまで雪に苦しめられてきた所ほど、逆手にとって雪をむしろ積極的に打ち出し、雪を利用して地域社会を活性化しようとしていると考えられる。したがって雪が造り出す美味しいお酒の銘柄に雪の字が多く付けられるのは当然のことで、地域生活と雪との関わりをよく表わした例と言える。

福井県でも上で述べたように雪崩などの雪害に苦しめられてきた歴史があり、県内において雪酒を結構見かける。これまで調べたところでは、以下のように蔵元10社で12銘柄の雪酒を出している。福井県内の蔵元は54社(1994年全国蔵元一覧による)だからおよそ5社に1社は雪酒を出していることになる。

- | | | | |
|-------------|-------------|--------------|-------------|
| ・「雪のまほろば国」 | 福栄冠酒造 (松岡町) | ・「越前雪のまち」 | 力泉酒造 (福井市) |
| ・「越前岬 雪舟」 | 田辺酒造 (松岡町) | ・「雪蔵百年 為国酒造」 | (福井市) |
| ・「越前岬 雪あかり」 | 田辺酒造 (松岡町) | ・「春夏秋冬雪越前」 | 越の磯 (福井市) |
| ・「雪中花」 | 安本酒造 (福井市) | ・「ゆきの酒蔵」 | 北芳商店 (今庄町) |
| ・「雪夢想」 | 菊桂酒造 (福井市) | ・「雪きらら」 | 畠山酒造 (今庄町) |
| ・「雪の旅人」 | 菊桂酒造 (福井市) | ・「極雪水造り」 | 寿喜娘酒造 (今立町) |

最近では、次に述べるように雪氷の冷熱エネルギー利用が盛んになり、日本酒を雪中貯蔵し低温醸成させることが各地で行われている。それらはほとんどが雪の名前が付いている雪酒である。こうした雪酒は日本酒ばかりではない。新潟県上越市の岩の原葡萄園は、明治27年雪室貯蔵雪によって発酵温度を調節

することでようやく良質のワイン造りに成功し、現在もこの雪室を使っていて「深雪花」という銘柄のワインを出している。このようにワインにも焼酎、ビールにも雪酒はある。地域生活と雪との関わりから生まれた雪酒を、イベント等を通して積極的に全国にアピールしていくことも地域活性化につながるものと考えられる。

6. 昔から身近で使ってきた雪の冷熱エネルギー

平成14年度、国の総合資源エネルギー調査会で新エネルギーの対象範囲が見直され、雪氷冷熱エネルギーも新エネルギーとして位置づけられた。これを受けて地方自治体等が、野菜、米、花卉など農産物の保冷や公共施設等の冷房用冷熱源として雪氷冷熱エネルギーの利用を積極的に導入することが全国各地で行われている。

しかし、こうした雪氷利用は今に始まったことではない。雪国の地域社会では昔からごく普通に雪を利用していた。初雪が降ると屋外に藁製の小さな小屋のような「雪むろ」をつくり、その中に大根やにんじん、ごぼうなどを「わらかます」に包んで入れ保存した。

冬場、雪の下になる雪むろの中は、温度ほぼ0℃、相対湿度ほぼ100%で外気温に左右されず常に一定の低温高湿環境が保たれる。新潟の頸城地方ではこの雪むろを、「にお（大根にお）」、「によう」などと呼んでいるが、福井の奥越地方では藁を編んだこの雪むろを「つぐら」と呼んでいる。雪むろの中は低温高湿環境のため、大根など“す”が入らず新鮮で、甘みも増して美味しくなる。野菜の雪中貯蔵は、雪国の知恵とすることができる。

また、電気冷蔵庫が普及する前は、地下に穴を掘り込んだり、地上に土手などで囲ったりして冬場の雪を集積し、おが屑などの断熱材や小屋掛けなどによって雪を覆って夏まで保存していた。これを雪室、雪穴、雪倉、雪小屋などと呼び、夏まで保存された雪氷は、飲食用、魚などの生鮮食品の冷蔵用、医療での熱冷まし用などに使われた。大野市では市内の商店が亀山近くの半地下式の雪倉に、今から約50年前まで雪を貯蔵していた（本多ほか、2003）。ごく最近、北川博正氏の調査により、勝山市遅羽町比島において、かつて漁業組合が設置し九頭竜川で捕れた川魚の保冷用の雪を保存した雪室跡が発見された（図-3）。この雪室跡は玉石コンクリート積みで、深さ4.4m、上面が5.2×5.5m、下底が4.1×4.2mあり、容積は約90m³ある。同じ北川博正氏の調査によれば、昭和16、7年頃、勝山市荒土町伊波の白山神社脇に、樺の木に囲まれたコの字型の自然の窪地を利用した雪室があった。近くの積雪をかき集めて踏み固め、落ち葉やむしろなどをかぶせ、入り口に木の扉を付けた雪室だったといわれる。また、勝山市では昭和30年頃まで、お寺や道場の屋根から落下して押し固められた雪にむしろなどをかけて融解を抑え、これを魚屋さんが切り出して鮮魚の冷蔵に使っていた。多雪地の勝山市ならではの、ごく手近なところでの雪氷利用が盛んに行われていたことがわかる。

日本では、将来的にエネルギー資源の不足が見込まれている。したがって雪国では設備投資やランニングコストが電気エネルギー利用に比べて安価に済む雪氷冷熱エネルギーの利用が注目されている。その際、つい数十年前まで身近で行ってきた雪氷利用の事跡を見直し雪氷保存のノウハウを学んで、現代版の雪室・氷室による雪氷冷熱エネルギーの利用に活用することも、地域活性化につながるであろう。



図-3 勝山市遅羽町比島の玉石コンクリート積み雪室跡
(人の立っている処が崩れかけている出入口部分)

7. おわりに

上にあげただけでも、福井県には興味深い雪の歴史や雪文化がたくさんあることがわかる。更に調査すれば、福井における地域生活と雪との関わりがさらに明らかになるであろう。最近の調査によれば、全国の都道府県のなかで、その位置が日本の中で特定できないナンバーワンは福井県であるという。地域生活と雪との関わりや歴史や雪文化などの発掘、蓄積、発信によって雪を積極的に利用し、福井の存在を全国にアピールすることが必要なのではないだろうか。

本論文は平成15年度日本雪氷学会北信越支部の鯖江大会で行った特別講演「福井の雪っておもしろい!—地域生活と雪との関わり—」を基にしている。

最後に、この論文を平成16年3月31日新潟大学を定年退官する小林俊一教授に捧げます。

参考文献

- 本多義明・杉森正義・近藤幸次・川本義海, 2003: 雪とつきあう福井の歴史, 福井, 地域環境研究所, 195p.
- 深田久弥, 1964: 日本百名山, 東京, 新潮社, 222p.
- 福井県, 1984: むらのくらし, 福井県農林水産部総合農政課, 224p.
- 福井新聞社, 1981: 豪雪を記録する, 福井新聞社128p.
- 和泉薫, 1999: 雪国における防災の知恵—雪崩の災害文化を考える, 雪氷防災研究会梗概集, **24**, 33-38.
- 和泉薫・小林俊一・矢野勝俊・遠藤八十一・大関義男・王昕, 2000: 過去100年間の日本の雪崩災害, 日本自然災害学会学術講演会講演概要集, **19**, 99-100.
- 川原茂, 1997: 鶴峰の残雪—越前甲の雪形と農事暦—, 民俗調査報告書1(川原茂), 8p.
- 田淵行男, 1981: 山の紋章—雪形, 東京, 学習研究社, 371p.
- 谷川健一編, 1981: 日本庶民生活史料集成, **23**, 年中行事「歳時詠録」, 東京, 三一書房.
- 敦賀市史編さん委員会編, 1979: 敦賀市史, 資料編, **5**, 547.